

8. ミナミキイロアザミウマに対するタイリクヒメハナカメムシの放飼効果

[要約]

ナスを加害するミナミキイロアザミウマに対する放飼効果は、タイリクヒメハナカメムシの方がナミヒメハナカメムシよりも優れている。

研究室名	病虫研究室	連絡先	0869-55-0271 (内線 240)
------	-------	-----	-----------------------

[背景・ねらい]

冬期の低温短日条件下でナミヒメハナカメムシは休眠し防除効果が減退する。タイリクヒメハナカメムシは休眠性が弱く、促成栽培での利用が期待されている。そこで、両種の放飼効果を促成栽培ナスで比較検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 11月上旬定植したナスに11月下旬と12月上旬の2回、株当たり1頭ずつタイリクヒメハナカメムシを放飼すると、4月下旬（試験終了時）までタイリクヒメハナカメムシの発生がみられた（図1）。
2. 無放飼区のミナミキイロアザミウマ密度は12月下旬から上昇し、2月上旬には葉当たり100頭に達して、3月下旬には全葉落葉した。また、ナミヒメハナカメムシ放飼区（以下、ナミヒメ区）では2月上旬からミナミキイロアザミウマの密度が上昇し、3～4月には葉当たり50～60頭の高密度になった。しかし、タイリクヒメハナカメムシ放飼区（以下、タイリク区）では12月上旬の葉当たり約2頭をピークにミナミキイロアザミウマの密度は低下して、12月下旬から3月上旬まで葉当たり密度は0.2頭以下となり、その後試験終了時まで葉当たり1.3頭以下の低密度を維持した（図2）。
3. 被害果率は無放飼区では全期間ほぼ100%、ナミヒメ区では3～4月にはほぼ100%となったが、タイリク区では1～2月には被害果の発生はなく、その後も3月が約10%、4月が約40%と少なかった（図3）。
4. タイリクヒメハナカメムシの密度はナミヒメハナカメムシに比べ2月以後低く推移している（図1）。これはタイリク区ではミナミキイロアザミウマの密度が長期間極めて低かった（図2）ため、タイリクヒメハナカメムシは餌不足になり密度が上昇しなかったためと考えられる。

以上の結果、ミナミキイロアザミウマに対するタイリクヒメハナカメムシの防除効果はナミヒメハナカメムシより優れ、ナスのミナミキイロアザミウマの防除に適している。

[成果の活用面・留意点]

1. タイリクヒメハナカメムシはピーマンのミナミキイロアザミウマに対して農薬登録されているが、ナスでは申請中である。

[具体的データ]

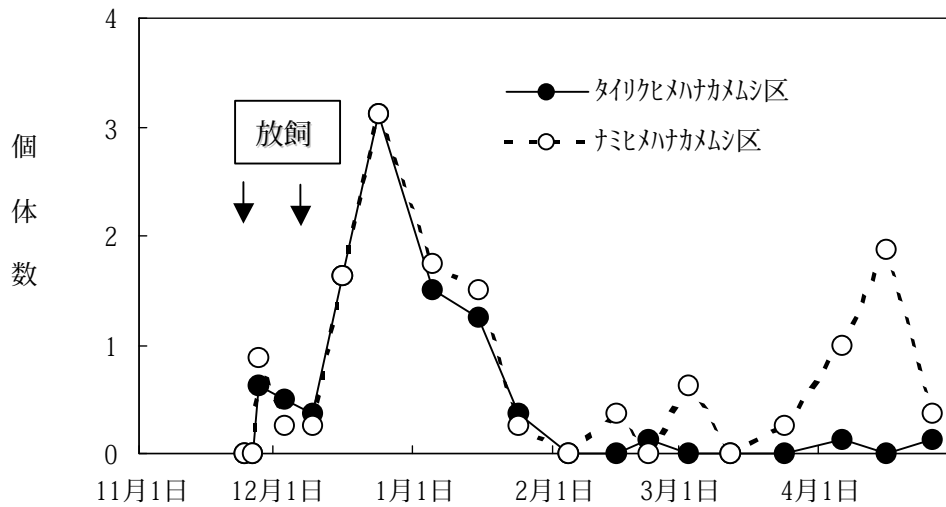


図1. ナスにおけるヒメハナカメムシ類の密度変動

注：11～1月は株当たり個体数，2月以後は200葉当たり個体数。

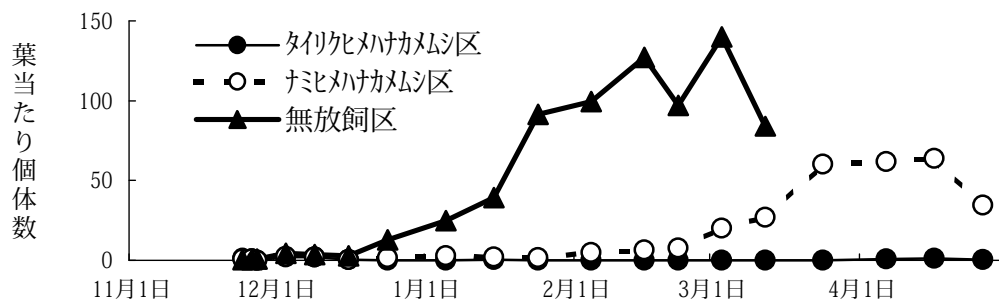


図2. ヒメハナカメムシ類を放飼したナスにおける
ミナミキイロアザミウマの密度変動

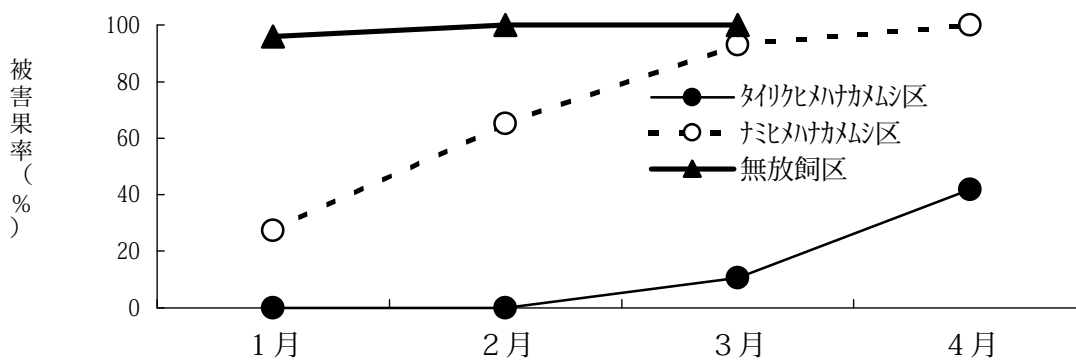


図3. ミナミキイロアザミウマによるナス被害果の発生推移

[その他]

試験研究課題・事業名：天敵による施設栽培ナスの害虫防除技術の確立

予算区分：国庫助成

研究期間：平成10～12年度

関連情報等：なし